

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

「社会問題」論は、リソルジメントがやり残したものとしての「南部」や「農民」の問題を総じて「社会問題」と認識することによって、圧倒的な文化的・経済的格差のもとで生きることを余儀なくされている人々を社会の内部に位置づける議論である。この「社会問題」の発見には、観念よりも現象の観察を重視する実証主義の学問的流行が、ひとつの契機となり、また道具となった。しかし、自由主義期イタリアにおける「社会問題」論を軸としてこの実証主義を見た場合、そこには、客観性や科学性という、実証主義がみずから標榜する性質とは一見矛盾するような、強烈な倫理性が見出されるのである。イタリアへの実証主義の導入の第一人者でもあったパスクアーレ・ヴィツラリの、実証主義的「歴史的方法」論と、彼が初めて世論に問うた「南部問題」論の比較検討は、そのような倫理性がどこから生まれるのかを探る糸口となる。ヴィツラリの実証主義的方法は、社会的現象の原因を、物質的関係ではなく人間の知的活動に求める。この方法を通じて「南部問題」を考察したとき、その原因は、国の指導的階級としてのブルジョアジーの、指導するべき人々に対する関心の欠如に求められた。そこから、「南部問題」の解決は、ブルジョアジーの自己改革なくしてはありえないという倫理的な結論が導き出されたのである。そしてこの倫理的な結論は、倫理が本来もっている実践への要請と共鳴し、「社会問題」論の命法ともいえるものとなった。

この性質は、1870年代半ば以降、「南部問題」をはじめとするさまざまな「社会問題」についての議論に固有の傾向となった。それは、「社会問題」の責任を指導的階級に（あるいは北部に）帰し、倫理的な自己改革をとともなう「善導」を要求するようなブルジョアジー中心主義を堅固に示す。けれどもそのパターンリスティックな認識枠組みは、同時に、「問題」と見なされる地域や人々を、指導的階級とともに、国民国家の将来という単一のパースペクティブのなかに位置づけるという意味ももっていた。別の言い方をすれば、「責任」という倫理的な場を措定することによって、指導的な階層と「下層階級」とを、同一の地平で記述することが可能になったのである。

実践的であろうとすることが倫理的であることを意味したのは、人文科学の分野においてだけではない。文学における実証主義的運動であるヴェリズモの代表的作家、ジョヴァンニ・ヴェルガは、漁・農民や鉱山労働者といったシチリア社会の最底辺に位置する人々＝

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

〈敗北者〉をイタリア社会のもっとも生々しい現実と捉え、実証主義科学の影響を受けた文体によって「あるがままに」描こうとした。この記述行為のなかには、〈形式〉における実証主義の理念と「生それ自体」という〈主題〉の結合が見られる。ここには、フランチェスコ・デ・サンクティスからパスクアーレ・ヴィッラリへとつながる、またデ・サンクティスからルイーゲ・カプアーナを介してヴェルガにいたる、観念論—実証主義の相互浸透のプロセスを見ることができる。学問は生に肉薄しなければならないという信念と、実証主義的方法的な結合である。イタリアにおける実証主義に内在する倫理性の源泉の一端は、ここに求められるのではないだろうか。みずからを〈敗北者〉と同一化することはないけれども、彼らの生に現実そのもの、生そのものを見出してゆくヴェルガの態度は、ヴィッラリら初期の「南部問題」論者と重なり合う。ヴェルガにおいては、人は、運命の循環的な大河のなかで、誰もが次の〈敗北者〉になりうるので、〈敗北者〉は厳密には「下層階級」に限定されない。だがこの神話的な世界観を通じて、実際に作品に描かれた〈敗北者〉—近代国家の諸制度に適應することができずにさらなる悲慘に落ち込んでゆく人々と、勝ち残った人々を、一種の「運命の共同体」と見なすことが可能になる。その意味でヴェルガの文学行為もまた、「社会問題」的視角の一翼を担う、知識人の実践の一形態と考えることができるのである。

「社会問題」論には、社会の諸矛盾を認識し、言語化して世論に対して提起すること自体に、知識人の社会的な機能がはさまれている。シドニー・ソンニーノの制度改革に関する議論は、「社会問題」的視角が開いた実践性をより明瞭に示しているということができるだろう。とりわけ「南部問題」が、この時期の知識人の実践の端緒となったことをよく示しているのが、ソンニーノかもしれない。「シチリア調査」を通じて、彼もまた、「南部問題」についてヴィッラリと同様の、指導的階層の「責任」という観念にたどりつく。より現実的で実際的なソンニーノにとって、指導的階層が、とくに行政権に収斂される社会的な義務の十全な遂行のために求めるのが、普通選挙制であり、「全体的利益」の代表者としての君主のみに責任を負う行政権である。「社会問題」を生じさせる、社会的現実と国家との乖離は、「多数者」の意志が国政に反映されないことが要因であると考えたソンニーノは、その分裂を克服する体制を構想したのである。重要なことは、この構想において、要求を汲み上げられるべき国民のうちの「多数者」は、最終的には自発性をもって政治に参入することを要請されるということである。「問題」として認識された人々—農民や、のちには都市工業労働者、それらの人々が展開する諸運動—は、単なる「善導」や「操作」の対象

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

ではなく、教育を通じて主体的に国家と社会に参画するべき人々と見なされる。ここにおいて「社会問題」的視角は、民衆（「下層階級」）を、その声に耳を傾けなければならない、意志をもった主体として把握する枠組みを用意した。社会改革は、「多数者」の声に答えるものでなければならず、また、最終的には「多数者」の自立と主体性を求めるという意味で、純粋な「上からの改革」ではないのである。

「社会問題」的視角はさまざまな局面でナショナリズムとの共鳴を見せる。そもそもイタリアという国民国家の誕生と確立の過程で生じてきたものである以上、議論は必然的にある一定の空間的な制限を受けているだろう。〈合意〉を体制の正統性の基盤とするという観念自体が、同一の歴史的経験をもつ領域性が多かれ少なかれ前提になっているものであるといえるかもしれない。しかしイタリア近代史には、この領域性を揺さぶる問題が存在する。「移民問題」である。19世紀末以降爆発的に増加した移民の大流出現象もまた、「社会問題」のひとつであった。国外へ移民したイタリア人に対するイタリア語・イタリア文化教育を活動の柱としたダンテ・アリギエーリ協会の第二代会長であったときのヴィッラリの講演やエッセイには、移民という「社会的弱者」に対して、「南部問題」に対するときと同様の、倫理的責任を求める主張が見られる。この場合、移民の自由を認めたとて、彼らにイタリア語という文明の言語を教育することが、倫理的な責務と見なされる。「優れた文明」にともなうこの責務は、移民先でイタリア人たちが出会う、他の民族に対しても適用される。それら他民族の人々が、彼ら自身の発展のためにイタリア語を必要としているなら、彼らに対しても倫理的責務は及ぶのである。「社会問題」的視角には、つねに両義性がつきまとうが、ここでもまたそれが見られる。この論理には〈文明化の使命〉が見え隠れしてはいるのだが、ヴィッラリにおいて、他民族は支配の対象ではない。理念的には、諸民族は「崇高な文明」の下に、各々の独立を保ちながら融和して共存するような様態が想像されている。イタリア人移民も、移住先の言語を学んで、その地での生活を向上させる権利があると考えられる。これは、その後の移民論が覇権主義的な色彩を帯びていくのとは、明らかに異なる論理に基づいていると思われる。「社会問題」論は多くの点で、イタリアという国家の政治的・経済的強化のための、国民の確立を意図している。しかし「社会問題」論の上述のような質を踏まえるならば、次のことは区別されるべきであろう。弱者は保護されるべきであり、優れた文明の恩恵にあずかるべきであるが、自立的であることも認められるという、「社会問題」論の拠って立つリソルジメント的な理念は、ナショナリズムの排他性とは異なるような、共存の可能性を示しているということである。ナショ

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

ナリズムにおいて「イタリア人」は、すでに閉じられた共同体となっていて、「文明」の「恩恵」というかたちの下であっても、外部から参入することは許されない。

国家統一によって、イタリアのエリートは、内部にある異質なものの存在を発見する。それは知識人たちによって「社会問題」として言語化され、農民や労働者、「下層階級」という具体的な存在として記述されるようになる。「社会問題」論は、それらの民衆がおかれた困難な状況を、近代国家が目指すところとの乖離として把握し、問題を放置することを倫理的責任において拒否するという認識枠組みを構築する。社会的変化の受け手として登場してきた民衆は、意志と要求を汲み上げられるべき集団となり、彼らの主体的な〈合意〉を獲得することが体制の正統性を保障するような存在と見なされるようになるのである。

ここには、「社会問題」論の両義性の最大のものを見ることができよう。「社会問題」論が、「現実のイタリア」との葛藤のなかから生み出した、民衆の主体化を認める倫理は、すべての成員の権利としての政治的平等という民主主義の原理を準備している。これに関わっていえば、第一次大戦後、グラムシは、工場労働者と、その工場で生産にたずさわる労働者の全員が構成する工場評議会との関係を、生産者というみずからの社会的機能において参加するという意味で、市民と議会制民主主義の関係になぞらえて、その民主性を評価した。「社会問題」論の地平の一端からは、確実にそこへいたる道がのびているといえるだろう。しかし、「社会問題」論が直面した現実の諸問題を克服するための社会と国家の一元化という理念には、個々の人間がもつさまざまな紐帯を断ち切って、国家へと直接的につなぎとめる「全体国家」の観念とも親和性をもつ瞬間があることもまた、間違いない。どちらも「社会問題」論のもつ展開の可能性ではあるだろう¹。

ポスト・リソルジメント期の支配的集団の内部から生まれ、右派の保守的なイデオロギーを超えて改革の必要を叫んだ「社会問題」論者たちの役割を歴史的に見るならば、グラムシが言うところの、「支配的社会ブロック」の内部にあって、「同じブロック内のもっとも反動的な部分によるカエサル主義」を挫折させるような分子と見ることはできるだろうか。

それらは、たしかに革命ではないが、すくなくとも、支配的陣営内部においても、息

¹ グラムシの工場評議会構想と、全体主義社会の関係については、上村忠男「〈組織された生産者社会〉の夢」『グラムシ 獄舎の思想』所収、青土社、2005年を参照のこと。

終章 自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践

のつまるような国家の結晶化作用を破壊し、国家生活と社会活動のなかに従来よりも数多くのべつのスタッフを流しこんでいるという意味においては、完全に反動でもないのだ。これらの運動も、旧来の指導者たちが汲みつくしえなかった活動的な諸勢力が旧社会のなかに潜在していたということをさしめしているかぎり、相対的に「進歩的な」内容をもちうるのである。もっとも、それらは「時代を画する」ことができないかぎりでは「周辺の勢力」であって、完全に進歩的な勢力ではないにしてもである。²

「カエサル主義（ボナパルティズム）」とは、一般的には、民衆の合意に基づいて正統性を得て成立した個人による独裁である。グラムシの用法では、カエサル主義は、競合する諸勢力が、つきつめれば互いの破壊へといたるような破局的な均衡状態をたもっているときに出現する、調停的な個人ないしは集団による独裁というふうと考えられる。「相対的進歩」という観点から見ることによって、右派／左派、保守／急進といった政治的立場の対抗関係とは異なる視点から、より具体的に「社会問題」論が機能した空間を分節化することができるだろう。「社会問題」を提起した知識人グループは、政治勢力としては脆弱であったが、その思想は、国家を構成するあらゆる市民（この時期には成人男子に限定されていたけれども）が、等しく意志を表明する権利を有する民主主義的空間の創造と、第一次大戦後にイタリアの歩む歴史を予示する要素とを同時に示す。そしてその指向性は、間違いなく、「法定のイタリア」と「現実のイタリア」との間の格闘のなかから生まれてきた。「社会問題」論は、知的な営みが、社会的現実との葛藤のなかから新しい言説空間をはぐくみ、それが歴史の実際的な可能性を導く、その一断面なのである。

² Antonio Gramsci, *Quaderni del carcere*, a cura di V. Gerratana. Torino, Einaudi, 1975, p.1681(Q.14, §23).アントニオ・グラムシ、上村忠男編訳『新編現代の君主』青木書店、1994年、164 ページ。